
虎人少年 欧州紀行記

tensuke

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虎人少年 欧州紀行記

【NZコード】

N4185D

【作者名】

tensuke

【あらすじ】

俳優結城聰史とその付き人小林虎人少年のお話です人気ドラマのスペシャル番組撮影のため舞台は欧羅巴虎人少年扮するスーパーモデルのティグと取り巻く人々の騒動をお楽しみ下さいませ

1・虎人 欧州口ヶに同行す（前書き）

お正月スペシャル（爆）帰つてきた虎人デス（笑）
ご笑納下さいませ

1・虎人 欧州口ケに同行す

1・虎人 欧州口ケに同行す

「虎人も出演するの?」

「いえ 僕はフランス語のトレーナーというかお手伝いで・・・」

「ああ あのウォンツ君の教育係?」

「そう・・・らしいです しかも頭の痛い事に・・・」

「え?」

「ティグで来いって言われて・・・」

「へえ・・・いいじゃんつ!俺 ティグちゃんと一緒にうれしいかもつ!」

「うおおいっ・・・」

「あ・・・ジョークです・・・でも何でティグ?」

「ティグはフランス語ペラペラだし ちょっとしたサプライズゲストだつて」

「へえ・・・じゃあちょっと位工キストラとかもあるんだな・・・

きつと

「そうですね・・・ワンカットくらい在るらしいです」

俳優 結城聰史とその付き人であり 自らも売り出し中の若手俳優

小林虎人は

同居しているマンションのリビングでそれぞれのスースケースに荷物を押し込みながら 今度の欧羅巴での口ケについてあれやこれやと他愛のない雑談をしている

聰史の主演する クラシック音楽が題材になつたコミカルなドラマは連ドラとしては異例の高視聴率と大人気をはくし

今回 お正月のスペシャル番組として 続編が制作される事になつた

「ティグで行くんだつたら
飛行機とか別便?」

……まあ……まだ詳しい事は聞いてないんですけど

三

まだそつちのスケジュールもはつきりしないんですよ

「虎人も大変だなあ
俳優とモテ川の『足のわらじ』
よく頑張って
るよ うん」

卷之三

僕はティイブなんて

「僕はティグなんて一刻も早く辞めたいんですつ！つ！」

「だからですつ！」

「まあまあ・・・実は男でしたって もう言いにくいよなあ」

小林虎人は叔母である有名デザイナー花井香の策略で女装させられ

スーパー・モデル テイグとして正体を隠して活動を強いられている

身長一八三センチにもなる虎人がヒールのある靴を履くと一九〇近

しかし、キツイ大きな黒い瞳と、ルージュの染まる大きな口の顔立ちは、力女になる

どこかアン一二イで性別不明な不思議な魅力に溢れ腰の細い体型はボーライツシユでもあり

コレクションの舞台では異色のモデルとして引く手あまたの人気者になってしまった

花井香のコレクションのトリを飾るドレスは必ずティグが着る事になっていた

それ程に 周囲に認知されてしまった今となつては
虎人は俳優としての活動とほぼ2分する程の割合で
スーパー モデル テイグとしての活動をこなしていた

そして今回 聰史のドラマがフランスでのロケを行うにあたつて
出演者のフランス語指導と ドラマのサプライズゲストとして
ティグに白羽の矢が立つたのである

ドラマ製作サイドにも 小林虎人がティグであるという事実を
知る者はなく 今回も 虎人は一人 こそそとティグとして
花井香に伴われて フランスへと向かう予定であった

不本意な仕事な上に はつきりしないスケジュールで
虎人はかなりイライラとフラストレー ションがたまつていた
その気持ちそのものといった手つきで
虎人は乱暴に荷物をスーツケースに押し込んでいった

2・虎人 生徒と対面す

2・虎人 生徒と対面す

「初めましてっ！ウォンツと申しますっ！」

「どうも・・・」

彼に会うのは一回目だ

彼は覚えてないかも知れないけど・・・といつか
ティグとして会うのは初めてだから気づくはずもないか

小林虎人と結城聰史はこのウォンツ青年に以前一度会っている
彼がユニットを組んでいる小沼徹平青年の
聰史への歪んだ想いが引き起こした事件

彼は小沼青年の肩を抱き

「僕がちゃんとついてますから・・・」迷惑をお掛けしました

そう言って 深々と頭を下げた

あの時の思い詰めた真剣な表情とは打って変わり

今日の前にいるウォンツ青年は

快活な人懐こい笑顔でティグこと虎人に握手を求めている
その手を握りかえしながら

虎人は複雑な想いにとらわれた

この青年が大切に想つて いるらしいあの小沼という青年のせい
で結城聰史の背中には大きな火傷の傷跡が残つた

虎人も随分な目にもあつた

仕事とはいえ こうして結城聰史と再会する事を

彼だって複雑な想いで引き受けたに違いない

まあ・・・

虎人はティグの姿なのでさして問題ないとして
結城聰史には随分と氣を使う事だろう
少し氣の毒にも思う

ともあれ

はじまつてしまつた仕事 とりかかつてしまつた仕事
全力でこなすしかない

虎人は 艷然とした笑顔でウォンツに微笑み
流暢なフランス語で答えた
「よろしくお願ひしますね」

ティグの笑顔にウォンツの頬がぽつと赤らんだ

虎人は内心 その反応にぎょっとした
自分が女装した時の周囲へ与える印象だと
その外見について

虎人は未だによく判つていなかつた

自分が女性として男性から魅力的だと思われるなど

虎人には想像もつかない事だつた

しかし

この瞬間 ウォンツは恋に落ちていた

3・虎人 デートに誘われる

3・虎人 デートに誘われる

「ティイグ・・・よかつたら一緒に食事に行きませんか?」
ウォンツの遠慮がちな誘いに虎人は背筋をのばした

「・・・えつ・・・」

正直 仕事が終わればさっさと虎人に戻りたかった
一刻も早くこの化粧を落とし カツラを外してすつきりしたかった
断ろう 断つてさつさとホテルに戻つて
結城さんと何か食べに行こう

そう思った矢先

虎人の視界にその結城聰史の姿が映つた

「結城あ～ん 赤いダウンありがとうございましたあ～
あつたかくてえ 快適ですう お礼にお食事でも」
「え? 気にしなくていいのに もう使わないやつだから
かえつてもらつてくれて嬉しいよ」
「結城さん 優しいからあ～ 食事食事つ! 行きましょう!」

共演の女優に腕を組まれ にこにこと答えていたその姿
虎人は心の隅で「ちつ・・・」と舌打ちをする自分に苦笑した
そして これみよがしな甘い声で

聰史にわざと聞こえるようにウォンツの誘いに答えた

「喜んで ご一緒させて頂きます」

聰史の片方の眉がぴくりと上がったのを虎人は見逃さなかつた

秘かな勝利感を味わいながら

差し出されたウォンツの腕に手をからめて現場を後にした

実際 ウォンツ青年よりもティグの方がかなり背が高い

虎人は簡単な着替えをしてくるので待つていて欲しいと彼に告げると
部屋に戻り ヒールの靴をかかとの低いパンプスに履き替えた

ウォンツはスマートにティグをエスコートすると
車寄せに用意させたハイヤーでパリの三つ星レストランへと
連れて行つてくれた

料理は申し分なく

また ウォンツの会話は思つた以上に楽しく
ティグを飽きさせないようにと心を配る様子が微笑ましく
虎人は ウォンツ青年の人柄に好意を持った

しかし 虎人であるティグはウォンツの恋に答えられるハズもなく
あまり思わせぶりな態度で彼を傷つけてしまう事がないように
気をつけなくては そう心に言い聞かせながら

虎人は 秘かに自分が聰史に張り合つた事を反省していた

そんな事は知るよしもないウォンツは

実際に楽しそうにニコニコと人好きのする笑顔で

終始ティグに対して紳士的であり申し分のないエスコートだった
ホテルまで送り届けられ

部屋へ無理矢理押し入るような事もせず

ウォンツは爽やかな笑顔で 「また是非一緒に出かけて下さい」
と少し気障な仕草でティグの手の甲に軽くキスをした

デートと思うと気が重くなるが

一緒に食事をして過ごした時間は確かに楽しく快適だつた

虎人は 一人部屋で化粧を落とし着替えると

ベッドに大の字に寝ころんだ

今頃 聰史はあの女優と一緒にいるのだろうか・・・
聰史なら どんなエスコートをするのだろうか・・・
聰史はどんなレストランを選ぶのだろうか

ばかばかしい

第一 自分は本来 エスコートされる側じゃなくて
女性をエスコートする側の男じゃないか
張り合い方を間違えている

そう 判つて いるのに

なぜか テイグの姿でいる自分を聰史が構わないのが悔しかった
「テイグが好きだと言つてたクセに・・・」

虎人は目を閉じた

眠りに落ちる時 セーヌ川のほとりで聰史と交わした
熱いキスを思い出した
ティグは金髪のロングヘアを優しく撫でられて
聰史の腕に抱かれて

恋人同士のようにキスを交わした

虎人は 甘い口づけの夢を見た

相手が聰史なのか ウォンツなのか

顔をはつきり見ようとしたが判らなかつた

虎人は深い眠りに落ちていった

3・虎人 デートに誘われる（後書き）

コメント・感想などお寄せ頂けると
今後の励みになります
よろしくお願ひいたします

4・虎人 対抗す

4・虎人 対抗す

「おはよう ティグつ！昨日はとても楽しかった ありがとう」

「おはよう ウォンツ こちらこそ 「」馳走様でした ありがとう
楽しかった」

「ホントにつ？よかつた 僕はあまり女の子と食事に行つたりした
事がなくて

退屈させてしまったんぢやないかとちょっと不安になつていたんだ」

「そんなこと・・・」

朝の口ヶ地 パリの街並みに焼きたてのフランスパンの香ばしい香
りが漂う

人懐こい笑顔でティグを待ちかまえていたウォンツは
片時も離れないぞという意気込みさえ感じさせる勢いで
ティグである虎人に寄り添い 話しかけ 微笑みかけ 並んで歩き
始めた

虎人は多少逃げ腰になりつつも 日本語がたどたどしいティグを演
じながら

ウォンツに応えていた
周辺視に聰史の姿を捜しながら・・・

（結城さん・・・いないのかなあ・・・つたく・・・）

心の中で秘かに舌打ちをした虎人に気づくハズもなく
ウォンツはひつきりなしに笑顔で何かを話しかけてくる

それに適当な相づちを打ちながら 虎人は聰史の姿を探していた

その時

「結城あ～ん　じゅうちゅうしちー今日はあ　エッフェル塔とかあ
あちこちで口ケですよ　観光ですよ　おいしいモノも沢山あります
よお～」

主演の若い女優が聰史の腕にまとわりつきながら「機嫌な声でまく
し立てている

少し困惑したような　照れたような微笑みを浮かべながら
結城聰史が女優に引っ張られるようにしてやつてくるのが見えた

（・・・・・ちっ・・・・・）　ティグである虎人は顔が軽く引き
つるのを感じた

しかし　その瞬間　ティグはおもむろに　まとわりつぶよにしな
がら

話かけ続けていたウォンツに向き直ると　満面に極上の笑みを浮か
べた

「ウォンツ？今日も台詞のレッスンお手伝いしますね　よろしく」
甘いハスキーボイスで囁くと　ちらりとその視線を聰史に投げる

（・・・・・）虎人の素晴らしいチャーミングなティグ姿
を視界に捕らえた聰史は

その挑戦的な視線に笑顔が凍り付いた

ウォンツの腕にしなだれかかるように身を預けながら

聰史に「ふんっ」とでもいいたげな視線を向けてティグである虎人
は背を向けた

（・・・・！何なんだ一体　虎人の奴・・・あの態度はっ・・・）

聰史には何がなんだかさっぱりと判らない

欧羅巴口ケに入つてからこつち　虎人とはろくに話もしてい

お互い　仕事に追われ一緒に過ごす時間もなく

そういうするうちに　気がつけば虎人の側にはいつも必ず

「口一と人好きのする笑顔のウォンツ青年が寄り添っていた

そして 聰史の傍らにも共演のおちゃめな演技も魅力的な
なかなかに実力派と言われる可愛い女優がいつも何かとくつついて
いた

聰史にすれば可愛い妹のような存在で
ついつい甘やかした言動も出れば それなりの相手もせざるを得な
かつた

しかし

それがなぜ 虎人であるティグにああまで露骨に無視される理由に
なるのか

聰史にはどう考えても思い当たるふしもなく
ただただ 呆然とその後ろ姿を見送るばかりであった

（結城さん 可愛い女優さんにもてるからって鼻の下伸ばして・・・
けつ・・

どーせ僕はこんな女装なんかさせられて 誰にも小林虎人だつてこ
とも知られずに

そうとも知らない男にいいよられて・・・あー 面白くないつ
！－）

一方の虎人にとって

自分のこのもつて行き場のない怒りとも焦りとも悲しみともつかない
複雑怪奇な思いが何なのか 実のところよく判つてはいなかつた
自分も可愛い女優にちやほやして欲しいのか

それとも ちやほやされている聰史を見るのが悔しいのか
はたまた 聰史を独占している女優への嫉妬心なのか

「ティグ? どうした?」

「えっ？ ああ・・・いいえ なんでも」

ウォンツに顔を覗き込まれ 虎人は我に返った

（結城さんがかまつてくれないから・・・腹がたつ？？僕が？？）

ふと心に湧き上がった思いがけない自分の気持ちに愕然とした

（そんな・・・ガキみたいなこと・・・）

「ティグ？ホントに・・・大丈夫？具合でも悪い？」

「・・・いえ・・・いいえ 大丈夫 ありがとう」

心配そうに自分の顔を見つめるウォンツに 虎人は力なく微笑んで

見せた

思いつきり背をむけて振り切ってきた聰史の事を思いながら・・・

5・虎人 夕暮れに涙す

5・パリの夕暮れに

「ウォンツ 本当に楽しかった ありがとう 食事もとてもおいしかった」

「そう? よかつたあ~ テイグはパリにも詳しいんでしょ? 僕は何も判らなくて スタッフの人にお店とか色々教えてもらつたんだ テイグに喜んでもらいたくて・・・」

「・・・ウォンツ・・・」

撮影を終えて テイグである虎人は今日もウォンツに誘われて夕食を共にしていた 洒落たレストランを出て 日が暮れかけてきた街並みを並んで歩いていた

「いや・・・その もし もし迷惑でなかつたらなんだけど・・・日本に戻つてからも

また 食事とか買い物とか・・・一緒に・・・その また会つてもらえないかな・・・僕と・・・」

「・・・ウォンツ・・・」

「あの 僕は その・・・今まで女の子と話をする事があまり得意じやなくて・・・ とても好きな人はいるんだ・・・でも そのちゃんとした恋じやなくて・・・

僕は女の子と恋愛ができるないんじやないかって・・・さすがに不安になつたりもして

でも なんだかティグは普通の女の子と違つて話しやすいというか・不思議で

（・・・・・男だからなあ・・・・・）
「すゞく魅力的で 可愛いのに・・・」
さつぱりしてて・・・
にかく

僕は君の事が好きなんだティグつ！」

（・・・・・げつ・・・・・）

「ティグは ティグにはもう心に決めた男性がいるの？」

「えつ・・・・」（・・・心に男性決めてちゃ・・・マズイよなあ・・・

・女性だろ僕だつて・・・）

「君みたいに素敵な人に恋人がいないワケないけど・・・やつぱり・
・ダメ？」

「あ・・あの その・・・」（恋人はいないけど・・・男だしなあ・

・僕も一応・・・）

「すぐに返事をくれなくともいいんだ 考えておいて ね」

「ウォンツ・・・・」

「わあ～夕日がキレイだよティグ ロマンチックだねえ～」
わざと話題と雰囲気を変えようとしているウォンツの様子がいたた
まれず

虎人は思わずウォンツの言葉を遮った

「ウォンツ～今日はありがとう ちょっと一人で行きたい所があ
るので

ここで失礼させてね また明日 撮影頑張りましうね じゃあ・
・

「あつ・・ティグ・・・・」

まだ何か言いたげに引き留めようとするウォンツをふりきり

虎人は夕暮れのパリを一人歩き始めた
本当のところ 行くあてなど何もない
ただただ ウォンツからの告白に応えられない自分と
何かが 魚の小骨がささつたようにひつかかっている自分の心に
一人で向き合う時間が欲しかった

（・・・参つたな・・・告白させちゃつたよ・・・参つたな・・・）
男である自分がウォンツに告白までさせてしまつた事に虎人は罪悪感を感じていた

適當な距離を保つて テイグに必要以上の好意を持たれないように そう気をつけて過ごすつもりだつたのに

（・・・参つたな・・・告白させちゃつたよ・・・参つたな・・・）

虎人はいつの間にか一人川辺のベンチに腰掛けていた

（はあゝつ・・・悪いことしちやつたなあ・・・ティグに惚れる男

がいるなんて

正直思いもしなかつたもんなあ・・・ウォンツ 結構いい奴なん

だよなあ・・・

小林虎人として友達になりたかつたよなあ・・・参つたなあ・・・

）

自分の思いに深く沈んでいた虎人は ふとベンチに並んで腰掛けた 人影に気づき

その顔をあげた

「・・・あつ・・・」

「やあ・・・ティグ どうしたの? こんな時間に一人でこんな所で

「ゆ・・・結城さん・・・」

それは 夕闇にも柔らかく白く輝くような優しい笑顔の結城聰史であつた

虎人の隣りに静かに腰を下ろした聰史が顔を覗き込む

虎人はその瞳を正面から見返す事ができず 思わずつづみき加減で つぶやいた

「ゆ・・・結城さんこそ どうしたんですか こんな所に一人で・・・ のだめちゃんは

彼女は一緒じゃなかつたんですね?」

「・・・彼女は今晚はスタッフの女性達と食事にでかけたよ」

「・・・へえ・・・結城さんでもふられる事あるんだ」

「・・・ふつ」聰史が小さく微笑んだ

「何が可笑しいんですかっ！ バカにしたみたいに笑わないで下さいよ」

「バカになんかしてない・・・どうしたの？ティグ・・・いや虎人「ベ・・ベつに何も 何でもないですよ・・・」

「・・・・・」

聰史の黒い大きな瞳にじっと見つめられて 虎人は口をへの字に尖らせた

「何でもないですよ・・・ただ ただティグがウォンツに告白されただけです」

「ティグが？」

「・・・・・・」聰史の問いかけに応えず 虎人は口を尖らせたまま俯いていた

「・・・・・！」突然顎にかけられた聰史の手の暖かさに虎人は目をあげた

思いがけず目の前に迫っていた聰史の端正な顔に虎人は思わず目を伏せてしまつた

次の瞬間 虎人の唇にふわりと暖かいモノが重なってきた

「んっ？」

それが聰史のふつくらとした唇だと気づくと 虎人は思わず聰史の胸元を突き放し

その口づけから逃れようともがいた

「・・・虎人・・・」

「なっ！ 何するんですか いきなりっ！！」

「何つて・・・ティグにキスを・・・」

「何でキスなんかするんですかっ！ どうしていつもそうやって僕をからかうんですかっ！」

虎人の瞳にうつすらと涙が滲んだ

自分でもなぜこんなにも聰史に腹をたててているのか

なぜ聰史の口づけから身をもぎはなしたのか

そしてなぜ自分が泣いているのか

虎人はさつぱり判らなかつた

ただ自分の心が果てしなく乱れている事に気づき

その乱れた心にたつ荒い波にもまれて 飲み込まれて

何が何だか判らなくなつてゐる それだけがはつきりと判つた

心配そうに覗き込む聰史の顔に 寂しげに切なげに見つめていたウ

オンツの顔が重なる

自分はどうなつてしまつたんだろう・・・

虎人は聰史に背を向けて肩を震わせて涙を零し続けていた

6・虎人 涙の向こう側

6・涙の向こう側

「お嬢さん お一人ですか？こんな時間に一人は危ないですよ エスコートしましょう」

「結構です」

「そんなこと言わずに よかつたらシャンパンでもご一緒して甘い一夜をいかがですか？」

「構わないでください」

「おー そのキツイ瞳が魅力的ですね 僕は一瞬で貴方の虜です」

「いい加減にして下さい」

「僕が素敵な夜をプレゼントしまーす」

てめえー いい加減にしろ うつとおしゃって言つてんだよお このうすらボケがあ

と 虎人がティグの猫かぶりをぬぎすてて 威勢のいい啖呵を切ろうとした瞬間

ティグである虎人の腕を掴み しつこく言い寄つていたフランス人の肩を

ぐいっと掴み 虎人から引き剥がす人影があつた

「失礼 僕の連れなので・・・」

耳に心地よい低音の美声がきりりと響いた

「ちつ・・・」小さく舌打ちをするとしつこかつた男性が背をむけて去つていった

「一人は危ないって言つただろ・・・一緒に宿に戻ろう虎人」

「ゆ・・結城さん・・・」

川辺のベンチに聰史を置き去りにして 早足で立ち去った虎人を追つてきた聰史であった

人目をひくティグの姿はアムールの国フランスの男性が放つておくハズもなく

案の定 しつこくからまれて足止めをくらつていた

聰史に肩を抱かれるようにして 虎人はホテルへと戻った

「ティグっ！・・・あつ・・・」

「ウォンツ・・・」

ホテルのロビーでティグの帰りを待つていたらしいウォンツの姿に虎人は身を固くした

そんな虎人の肩を一層抱き寄せるようにして聰史がウォンツに穏やかに言う

「彼女 ちょっと疲れているようだから 僕が部屋まで送り届けるよ」

「あ・・・はい・・・」 ウォンツは虎人を見つめたまま力なく応える虎人は小さく「おやすみなさい」とつぶやくと聰史に促されるに従つてロビーを後にした

背後にウォンツの視線を感じながら 虎人は肩に回された聰史の腕に身を任せていた

部屋の前で虎人は聰史の腕をふりほどいた

「ありがとうございました また明日・・・」

そう言つて 一人部屋へと入ろうとした虎人の身体を抱き締めるようにして

聰史はそのまま部屋へと入り扉を閉めた

「なつ・・・」

驚いて少しよろけた虎人を更に深くその腕の中に抱き締めると聰史はその耳元にとろけるような声で囁いた

「虎人・・・どうしたの」

「どうしたつて……」ムキになつて聰史の腕から逃れようと
する虎人を抱き締め

うつすらと涙の跡の残る虎人の尻に聰史はそつと口づけた
そして そのまま柔らかい唇をすべらせるようにして
虎人の頬へ そしてその唇へと口づけた

「んづ・・・・」

深く抱き締められ 唇を塞がれ 甘い口づけを繰り返されて
虎人の思考は白くぼやけた

身体の力が抜け 逃れようともがくことを諦めた

ようやく聰史の唇が虎人を解放した時

虎人の口から長いため息が漏れた

「ぼ・・僕・・・何が何だか・・もう ぐちゃぐちゃですよっ！-！」

「

「虎人」

聰史に優しく抱き締められて

その 幾分自分より華奢な それでいてしつかりとした筋肉に覆わ
れた

聰史の胸に顔を埋め 虎人は溢れてくる涙を止める事ができなかつた

静かに虎人の背中を撫でながら

聰史は虎人を抱き締め続けた

6・虎人 涙の向こう側（後書き）

ティグになつてると いつもより「乙女」になつてしまふ虎人（爆）何ででしよう
今しばらくお付き合い下さいませ
コメント・感想などお寄せ頂けますと
今後の励みになります
よろしくお願ひ致します

7・虎人 撃沈す

7・パリの夜

どの位たつただろうか 気がつくと虎人は聰史に肩を抱かれるようにして

ベッドに並んで腰をおろしていた
聰史は虎人の背中を優しくさすりながら しゃくりあげる虎人を黙つて見つめていた

その大きな黒い瞳を縁取った睫が瞬きに併せて小さく震える
きれいだなあ 虎人はぼんやりとそんな事を思いながら彼を見つめていた

どの位 そうやって見つめ合っていたのだろうか

虎人の涙もしゃくりあげる震えもおさまった頃
彼の穏やかな声が囁いた

「虎人・・・どうして俺の事を避けてたの?」

「さ・・・避けてなんか・・・それは結城さんの方が・・・」

「俺?」

「彼女と・・・のだめちゃんといつも一緒にいて楽しそうだったし・・・

・
「・・・・虎人」

「ティグの事なんか眼中にないみたいだつたし

し・・・仕事だからあたりまえだけど 仕方ないけど・・・でもせつかく欧羅巴・・・

一緒にまた来られたのに・・・全然話もできなくて・・・僕は僕で一生懸命やつてたのに 裏目に出たつて言うか・・・ウォンツにも悪い事しちゃつたし・・・
もう・・何が何だか・・・

「虎人 僕はいつも虎人見てるのに ティグは僕の理想型だつ

て知ってるよな？」

「……だ・・だつて」

「俺だつてそりやあ面白くなかったぜ テイグはウォンツ君専属の教育係みたいでさ

いつだつて彼がティグの側にいて とりつく島もなかつたぜ」

「そ・・・そなこと・・」

「ティグは・・・結城聰史の恋人・・だろ？」

「へつ・・・・」（そ・・・そこまで断言されると・・・またちょっと違う様な氣もしてくるんですけど・・・）

「虎人・・いや ティグ ウォンツなんかに渡すつもりはないよ」「ひや？？？」

再び 热烈なキスに襲われて 同時にベッドに押し倒されて呻いた拍子に開いた唇の隙間から聰史の舌が滑り込んできた甘い口づけに 絡まる舌の感触に 虎人の思考回路はショート寸前になる

「・・・うう～りやあああ……うおおおいいつ……やめんかいつ！」

「・・・もお・・色氣がないなあ・・虎人お～」

「色氣いうなあああ～～やめえいつ！なんで押し倒すうつ～～」

「え？ らぶしーんでしょ やつぱここは・・・」

しつと言ひ返す聰史に言葉を失う

「・・・・・つふ

「・・・・・つふつはつはつはは」

「はははははは

聰史と虎人 二人ほぼ同時に吹き出した

虎人の頭からブロンドのロングヘアのカツラをはがしどり

聰史が正面から向き合つて静かに言つた

「ウォンツ君にはティグのままちゃんとお断りをした方がいい
虎人だつて知つたら彼はショックで立ち直れなくなるよ・・・
やつぱり男しか好きになれなかつたのか つてね」

「ああ・・・やつぱり結城さんもウォンツ君は小沼君の事をつて・・・
気づいてました?」

「そりやあ 判るだろお・・・前の事件の時 そだらうなつて思
つた」

「ですよね・・・」

「だから ちゃんと女の子にも失恋できたつて思わせてあげなくち
やな」

「ですかねえ・・・なんか複雑ですけど・・・」

「虎人のさあ ティグがチャーミングすぎるんだよね(笑)」

「益々複雑なんですけど・・・」

「俺もティグちゃんに夢中よつ 首つたけ 大好きつー愛してる」

「・・・・・うおおいつ・・・」

「あ・・・虎人らしくなつた」

「・・・え・・・」

「いつもの虎人に戻つたね」

そう言つて 聰史は優しく微笑んで虎人の頭をてんてんと叩いた

「・・・ういっす・・・」

虎人は照れくさそうに笑つて俯いた

その耳元に聰史が色つぽく囁き 耳朵を甘く軽く噛んだ

「化粧落として虎人に戻つてよ 俺は虎人もアイシテルよ」

「・・・うつ・・・・・」

虎人少年 一点集中の血液の流れに襲われ やや前傾姿勢のまま
洗面所へと駆け込む事になつた

恐るべし フエロモン大魔王 結城聰史

まだまだ若い小林虎人少年であつた

若き虎人少年が化粧を落として戻った後のお話は
・
・
・
・
また 別のお話（笑）

8・虎人 帰国す

8・そして帰国

結局 テイグは結城聰史演じる主人公がコンクールで優勝した際にトロフィーを手渡す美女の役でサプライズ出演を果たした

ウォンツ青年のフランス語はティグの指導のかいもありなかなかに見事な出来映えであった

撮影は厳しい日程の中 ハードなスケジュールながらも順調に進み無事 全ての行程を終える事ができた

全てのシーンを取り終えて スタッフ 出演者揃って打ち上げの夕食会が催された

その席でも虎人は 花井香の最新モデルのドレスに身を包み手慣れた化粧でティグになりきっていた
もう一人の主役であつた女優もティグに興味津々で片時も側を離れようとしなかつた

「ティグは背が高いねえ、 キレイだねえ、 いいなあモデルさん
「・・・そんなこと・・・のだめちゃんだつて可憐いですよ
「やあだあーっ！－きやつ きやつ きや」

無邪気にはしゃぐ女優を相手に艶然と微笑むティグの姿を聴史が優しい眼差しで見守つている

そんな聴史に気づいてか気づかずか ウォンツが聰史に声をかけてきた

「結城さん・・・結城さんとティグさんは随分親しいんですね
「ん？ ああ 以前からの知り合いだし 仕事も何度か一緒にやつ

た事もあるからね」

「結城さんじや・・・かなわないな・・・やつぱり・・・
ほとんど聞き取れない程の小さな声でつぶやいたウォンツに
聰史はわざと聞こえなかつたフリをした

「え？ 何か言つた？」

「いえ・・何でもないですっ！」

「そつ？」 気障な程にそり気ない笑顔でやり過げす聰史であつた

「ウォンツ・・・あのね・・お話が」

ハスキーナ声でティグがウォンツを皆から離れた会場の隅へと促した

「ティグ・・・」

「あの・・・あのね・・その」

「いいんだ もういいんだ ティグ

「え？」

「僕 これでも案外男らしい性格なんだよ 諦めもいいから安心してよ」

「・・・ウォンツ」

「君の心の中の人つて 結城さんなんでしょう？」

「え・・いや・・・いえつ・・それは・・」

「いいんだ もういいんだ ティグ 何も言わないで

「でも」 (うおおいつ！ それはちょっと違うからつ！-！)

「彼も君の事 大切に想つてるみたいだし・・・僕は潔く身をひくよ

「・・・ウォンツ」

「まあ 僕にもなんとなく一緒にいてくれる相手はいるからさ 心配しないで

「・・・」 (小沼か？ 小沼か？ いいのか？ それで？？ 男でいいのか？？？)

「じゃあ これからも いいお友達の一人にはしておいてよね
明るい笑顔で去つていくウォンツの背中を見つめながら

虎人は複雑な思いで一杯であつた

「一五七」

「うわへ……びへつた……とおじいさんはなにでそれこよ
うへ」

いきなり至近距離で耳元に名前を囁かれ 飛び上がる程驚いた
ウォンツを見送つてぼおつとしていた虎人の隣りにいつの間にやつ
てきたのか

聰史が寄り添っていた

—じゃ…ティケ みんなが待ってるよ
一緒に飲もう

「アーティスト、音楽」

「ええ、ちやんと

「ちゃんと俺が恋人だつて宣言した?」

「元炎です」

「・・・つたく・・・」

日を置かず 慌ただしくスタッフ一同帰国の日を迎えた

聰史はハードなスケジュールでそのままCMの撮影にタイへと飛び虎人は一旦はティグとして帰国し その足で再び

今度は小林虎人として 結城聰史の仕事場へと付き人として駆け付けた

冬を迎えた日本と違い、タイは蒸し暑い夏そのものだった。

「歐羅巴の寒さの次がこれじや
ね」 結城さん 体調崩さないで下さい

虎人の差し出した冷たい飲み物を受け取りながら聰史が笑いながら応える

「大丈夫 案外俺はタフだからね まあちょっと体重は落ちたけど
なあ・・・」

「ですよね・・・日本に帰つたら たらふく焼き肉喰いに行きまし
ょうね」

「だな（笑）」

「ですよ」

「なあ 虎人」

「はい？」

「やつぱ・・・ティグちゃんもいいけど 虎人というのが楽しいな
はあ？」

「マジで」

「よして下さいよ 気味が悪いなあ」

「アイシテルよとらと」

「・・・・・うおおおいっ！」

一人が住み慣れた東京の部屋へと無事に戻れたのは
この後 まだ数週間の後がありました

「結局さあ・・・

「はい？」

「虎人は 僕にかまつてもうえなくていじけてたんだろ？」

「なんのことでしょう」

「欧羅巴でさ パリの川辺のベンチで一人で泣いてた」

「さあ・・・・覚えがないですねえ」

「俺が抱き締めたらしゃくり上げて可愛かつたなあ～ティグちゃん」

「・・・・・うおおい」

「俺が可愛い女優さんと一緒にいてヤキモチ妬いたの
・・・・・うおおい」

「で 妙な対抗心燃やしちやつたら男にマジ惚れされちやつて
・・・・・・・・・・・・」

「大変だつたねえ 虎人くうくん」

「…………」

「素直に俺に 寂しいんですけど って言つてくれたらよかつたのにねえ」

「……殺す！」

「ひやあああ

哀れ 結城聰史 つまらないからかいで虎人にちよつかいを出し逆鱗に触れる

この後 虎人による「砂漠のプロメテウス作戦」が敢行された事は言うまでもない

「ひやあ～っははははは や・・やめっ！脇腹はマジで勘弁してっ

！～ひやああはははは

「許しませんから」

「きやあ～っはははははあああ～

「うりやあああ

「はははははは・・・・はあんつ」

「・・・・はあんつて・・・

もつれ合つてくんずほぐれずじやれあつて

若い虎人くん ただで済むはずもなく

フェロモン大魔王の魅力に立ち向かえるワケもなく

「んんつ・・・・結城さんのキス・・・・H口すぎ」

「そあ？」

いつもの二人 ずっと二人 いつまでも二人

そんな幸せな二人でありました

え？ この後の顛末ですか？

それは18禁（爆）

それはまた別の話

おわり

9・パリの夜～あれから

9・パリの夜～あれから

「化粧落として虎人に戻つてよ 僕は虎人もアイシテルよ
「・・・うつ・・・・・」

虎人少年 一点集中の血液の流れに襲われ やや前傾姿勢のまま
洗面所へと駆け込む事になった

恐るべし フェロモン大魔王 結城聰史
まだまだ若い小林虎人少年であつた

若き虎人少年が化粧を落として戻つた後のお話は・・・・・

また 別のお話（笑）としましたので

今回は あのパリの夜のお話をいたしましょう

「ひやあ・・・参つた・・・」

そそくさと化粧を落とし シャワーを浴びる
虎人はわざと少し冷ための湯を頭から浴びた
頭と一点集中の血液を冷やすため・・・

「結城さん お先に風呂頂きました 結城さんもどうぞ」

パウダールームから出てきた虎人は
いつものぶつくりとしたポーカーフェイスを取り戻していた
大きなタオルを腰に巻き
小さめのタオルで髪の毛をこじこじと拭きながら
虎人はホテルの部屋に備え付けられた
小さな冷蔵庫からミニネラルウォーターを取りだした

「うん それじゃ俺も汗流してこよっかな

「ういっす」

水をボトルから直接飲みながら 聰史を見送る

ほどなく パウダールームからは盛大なシャワーの水音が聞こえてきた

同時に聰史の声が

「虎人あー シャンプーなあいー」と聞こえる

「ええーっ 置いておきましたよーしょおがないなあ・・・」

虎人はパウダールームの鏡の前に置き忘れられていたボトルをとるとシャワールームのドアをノックした

「結城さん 開けますよーシャンプー」

「おあーっ さあんきゅー」

がちゃつ・・・

「・・・・・・・・」

虎人は 手にしたボトルをあやつくり落としそうになつた

湯気で曇つたガラスブースの中に背中を向けて立つている結城聰史 気持ちよさそうに首をゆっくりと回しながら頭からシャワーを浴びている

無駄のないほつそりとした後ろ姿

意外にもしつかりとした筋肉に覆われた肩から背中に 湯が弾けて流れる

しなやかに長い腕や細く長い首が丹頂鶴を思わせる美しさだ

輝く黒髪 艶めかしく湯を弾く真珠色の肌

背中にうつすらと残る火傷の跡

天使の羽の名残に思える尖った肩胛骨がしなやかに動く

驚くほど細い腰から 形の良い小さな尻が続き

引き締まつた太股からすりとした両脚へと湯が流れゆく

虎人はしばし その姿に目を奪われその場に立ち尽くしていた

「・・・虎人？」

キュッと蛇口を捻る音がしてシャワーの水音が消えた

「・・・はつ・・あ・・あのシャンプー ここに置きますから！」

虎人はようやく固まつてしまつたような指でシャンプーをブースの側に置いた

そして慌ててパウダールームを後にした

「ひやあ・・・・同じ男とは思えないよな・・・あんなに綺麗なヒトがいるなんて・・・」

虎人は今しがた思いがけず目撃してしまつた聰史の後ろ姿が脳裏に焼き付き

その透き通るような真珠色の肌に艶めかしく湯が弾けていた様子が思い出され

またしても身体中の血液が一点に集中してくるのをどうにもできなかつた

「へタなグラビアアイドルよりエロいよな・・実際・・・」

虎人は飲みかけの水を飲み干すと力なくベッドに倒れ込んだ

「・・・・と・・・とらと?・・・寝てるの?ははは可愛い寝顔しちやつて」

聰史がシャワーを終えて出てきた時

虎人はベッドに俯せて穏やかな寝息をたてていた

ティグで丸一日を過ごすというのは

虎人にとってもなかなかない経験であり それなりに気も使い疲れる事なのだろうと聰史は思った

虎人の眠るベッドの端に腰を下ろすと

聰史は優しく 虎人の額に乱れた前髪をすいた

「んん～つ・・・」 虎人が小さく唸ると仰向けに「じろり」と身体を捻った

無防備に唇もうつすらと開いたまま すうすうと寝息をたてて いる
「くつくつく・・・ 可愛いなあ・・・ いつものでかい態度の虎人じ
やないみたいだな」

聰史は笑いを堪えながら虎人の寝顔を飽きずにつめていた
虎人を起こさないように気をつけながら
そつと布団をめぐり 虎人の隣りにもぐりこみ
自分と虎人の肩口まで布団を引き上げた

「おやすみ」

ちゅつ と軽やかな音を立てて虎人の頬にキスをすると
部屋の明かりを落とし 聰史も眠りについた

「・・・ん？・・・あれ・・・？あ・・・結城さん・・・」
どの位の時間なのか 薄暗い部屋の中 ベッドサイドの時計を見る
2時を少し回っていた

身体の右側に重みと暖かさを感じ ふと虎人は目を覚ました
見れば 虎人の右腕にしがみつくようにして聰史が眠っている
まるで小さな子供がするように

子猫や小犬がすりよつてくるような

無意識であろうが くすんと小さく鼻をならし

虎人のぬくもりを求めるように身体の位置を「ごそごそ」と動かす
長い睫が白く小さな顔に深い影を落とし

まるでおとぎ話の眠り姫のように可憐で美しい寝顔だった

「結城さん・・・しがみついてる（笑）子供みてえ・・・」

虎人はくすつと笑うと聰史がしがみついていない方の左手で
そつと聰史の柔らかい髪を撫でてみた

聰史のふっくらと赤い唇がすぐ目の前にある

吸い寄せられるように虎人は聰史の唇に唇を重ねた
しつとりと柔らかく暖かかった

しばし聰史の唇の感触を楽しんだ虎人は満足げな微笑みを浮かべ
聰史の額に口づけると小さく囁いた

「おやすみなさい・・・結城さん」

静かな夜だった

二人 寄り添い 抱き合うようにして深い眠りに落ちていた

虎人と聰史 どんな夢を見ているのやら

静かな夜が更けていった

10・東京の夜～あれから

10・東京の夜～あれから

「ひやあ～っはははははは や・・・やめつ！脇腹はマジで勘弁してっ
！～ひやああははははは」
「許しませんから」「
「きやあ～っはははははあああ～」
「うひやあああ」「
「はははははは・・・・・はあんつ」「
「・・・・・はあんつて・・・」
もつれ合ってくんずほぐれずじやれあつて
若い虎人クン ただで済むはずもなく
フェロモン大魔王の魅力に立ち向かえるハズもなかつた虎人の
二人の東京の夜のお話をいたしましょう

「んんつ・・・・・結城さんのキス・・・・H口すぎ」「
「そお？」

「H口い・・・・・」「
「そお？」「
「ものすじ～H口い」「
「そおかなあ・・・・・」「
「脳みそが破壊される」「
「はははは 何じやそりや」「
「でも・・・・不思議ですよねえ・・・・・」「
「何が？」「

「結城さんて・・・今までラブシーンらしいラブシーンって

ドラマでも映画でも あんまりやつてないですよね・・・」

「えーっ 僕前バリしてケツ丸出しのシャワーシーンとかやつてる

ぞ」

「それって ビッチかってこいつとサービスショットっぽいし・・・」

「はあっ?」

「すごい濃厚なキスシーンとか すごいベッドシーンとかって

ないですよねえ 結構いい歳なのに」

「虎人・・・今いい歳ってところに力込めたね・・・」

「えつ?いや そ・・・そんなことないんですけどね 実際ねえ」

「そーかなあ・・・普通にラブシーンもやつてきたつもりだけど・・・

「・」

「結城さんの演じてきたラブシーンって 不思議にちつともイロつ

ぽくなくて・・・

なんていうか・・・相手の女性に 押し倒されてる系?とか

「なつ・・・」

「自分からのキスシーンなんてこないだの欧羅巴で2回田位?氷壁

以来?・?」

「そ・・・そんなことないっ」

「一番イロつぽかつたのって 雪山で戦闘機の中で死んじやう所
あれ ほら西崎さんに抱きかかえられて息も絶え絶えっていうシーン
ヘタなラブシーンよりイロつぽかつたし」

「なんですか?・?」

「不思議ですよねえ 結城さんて 女性と絡むシーンになると途
端に

色気がなくなるつづうか 反対に女優さんを喰つちやうつづうか

結城さん単体で演技してる時の方が断然色気ムンムンですもんね・・・

・」

「・・・虎人・・・何がいいたい・・・」

「えつ？いえ 別に何も・・・ただ こんなに普段フェロモン大魔神なのに

どーーーーーしてラブシーンがないのかなあ～って素朴な疑問です
もしかして 事務所的にNGとか？？結城さんの希望？？？」

「んなワケないだろつ！俺だつてラブシーンやりたいわいつ！」

「ですよね～」 フェロ話も下ネタも大好きですもんねえ とりあえず正常な

青少年ですよね～ でも あれですね」

「なに」

「結城さんのセミヌードとかって やばすぎて放送禁止かもしれませんね」

「なんですか～？」

「一人で蕎麦すすつてるだけで あれだけエロい俳優なかなかいませんしねえ」

「エロ・・・？」

「巨乳のグラビアアイドルよりやばいですもん

ダイナマイト級のフェロモン放出 真珠の玉の肌 なんて」

「・・・玉の肌・・・」

「女優さん相手にさつきみたいなエロちゅうーしたら訴えられちゃうかも」

「・・・訴えられる・・・」

「そんでもって自分より綺麗な肌の男優となんか共演したくないかも」

「も」

「・・・共演したくない・・・」

「そんでもって自分よりエロっぽい俳優なんですごくイヤかも」

「・・・すごくイヤ・・・」

「そんでもって撮影するスタッフも命がけかも」

「・・・い・命がけ？？？」

「結城さんの あーーーんな顔や じーーーんな顔とか あーー

ーんな声

ぜつえつたい放送禁止だし 目の当たりにしたら即死！爆死！

瞬殺モノ!

あれ？結城さん？」「しました？？

頭を抱え込み 長身を小さく畳み込むようにして体育座りしてしまつた聰史に
虎人は呑気な声をかける

11
・東京の夜～その2

「…………お前…………俺にどんな恨みがある？」

「恨み？」

「なせそこまで俺を追って詰める!!」

何が糸坂さん通り詠めるのが嬉しいのか、三三

「アリババ」

「…………じゃあ確信犯か」「

「何も」

74

- 1 -

「結城聰史」

「結城聰史のお色気シーンなんて18禁モノですか?」

•
•
•
•
L

「万が一そ

二二

ボディーから離れないで襲われますよ
攫われますよ
拉致さ

卷之二

卷之三

•
•
•
•
—

「結城さん？」

「結城さん？」

聰史が力なくがっくりと頭をたれているのを覗き込む

「結城さん?」

「とらと・・・俺の俳優人生はこれからどうなるんだらうか・・・

「へつ?」

「女優と絡めない俳優なんて・・・使い道もないよなあ・・・

「はあ・・・」

「ラブシーンだつて 正直虎人の言う通り今までそんなにハードなオファーがなかつたんだよな・・・疑問にも思わなかつたけど・・・

・

「はあ・・・」

「それなりにこなしてきたつもりだつたけど・・・言われてみれば確かに・・・くんずほぐれずつて・・・なかつたなあ・・・」

「はあ・・・」

「虎人なんか『レビュー』作のドラマでいきなり熟女相手の濃厚ベッドシーン

あつたよなあ・・・

「ありました」

「断言するなよお・・・余計へこむ・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・

気まずい沈黙が流れた

ほんの軽い気持ちで感じたままの疑問を口にしただけだつた虎人は思いの外に聰史が深く落ち込んでしまつた事に少し動搖していたどうしようつ・・・こんなにへこませるつもりなんてなかつたのに・・・

「結城さん・・・僕・・・す・・すみません あの・・・」

やりきれずに 傾いている聴史の顔を覗き込むようにして

虎人が声をかけた

「僕・・・深い意味なんてなくて その ちょっと結城さんのH口
ちゅーに

勝ち田がなかつたのが悔しくて ちょっとだけ意地悪な事言いまし
た・・・

ごめんなさい・・・あの・・・ホントに 結城さんはすげーいい俳
優さんだし

演技も上手いし 格好いいし いろんな表情持つてるし
何の心配もないっていうか・・・全然大丈夫っ だから・・・その」
必死で聴史の「機嫌を治そうと 気分をもり立てようと話し続けた

ちろつ・・・・・

聴史が横田で睨むように虎人に視線を投げてよこした

「・・・・・つう・・・・・」 思わず虎人の腰がひけた
それ程に 聴史の周囲には あの欧羅巴ロケで演じたキャラそのも
のの

「負」色のどす黒いオーラが渦巻いていた

「ゆ・・・・・結城さん?」

「ぐすんつ・・・・・」

「結城さん?」

「しくしくしく・・・・・

「結城あ～ん(涙)『ごめんなさいってばあ・・・ねえ泣かないで』

「うひうひうひうひ

「ねえ・・・結城さん?泣かないで?ね?」

虎人が聴史の髪をそつと撫で その顔を覗き込んだ

その時

「・・・んつーー」

虎人はいきなり聰史の両腕に抱え込まれ その唇を塞がれた
そしてそのまま抱き締められ 深く口づけられた

「んん～っ・・・っはあっ・・・」

ようやく解放された虎人は深くため息をつくと抗議の声をあげた
「なんですかつ！いきなりっ！～」

「仕返し」

「・・・・・うお おいっ・・・」

けけけけ と軽やかに笑う聰史からは先ほどまでの
どす黒い落ち込んだムードはかけらも感じられない
「・・・演技派ね・・・」 虎人は再度深いため息をついた

12. 東京の夜～その3

「いーーもん 気にしないモン 俺は俺の俳優人生を歩むんだ！ 俺のペースで 俺のやり方で 俺なりの道を進むんだつー！」

卷之三

い
い
い
も
ん
気
に
し
な
い
モ
ン
テ
ア
シ
リ
ン
な
く
て
セ
ヘ
リ
き
た

卷之三

いい
つか俺の必殺工口ちゅうりを仕事にいかしてみてせるわいいつ！
！！上

卷之三

累たして

卷之三

聰史の工口ちゅーが公共の電波に乗ってお茶の間に届く日がくるのか

虎人にはとんと検討もつかない事だった
まず無理だろう
そう思った

制作サイドの都合でここに「も」もある

何より相手の女優が嫌がるに違いない

聰史との共演は嬉しいハズだし ラブシーン 자체は大歓迎だろうつ
ても

いざ放映された時に
自分よりも美しく色っぽい男とラブシーンを
演じる事を

よしとする女優がいるとも思えない・・・・

「……虎人？何考え込んでるの？」

今度は虎人が頭を抱え込んでいた そして呻くように呟いた

「結城さん……」

「へ？」

「僕……結城さんの あーんな顔やーーんな顔 誰にも見せたくないです」

「虎人？」

「僕だけが知ってる結城さんの特別な顔 誰にも見せたくないです」

「虎人……」

「必殺工口ちゅうーも 誰にもして欲しくないです」

「……つふ」 聰史は小さく笑うと虎人の頭を抱き寄せた

「虎人……ありがとう」

「結城さん？」

「お前なりの慰めだろ？ありがとう 僕の工口ちゅうは虎人だけだよ

「……それもまた ビミョーな気分ですけど……」

「なんだよ……嬉しくないのかよ」

「……び……びみよお～デスよ……実際

「ふんっ」

「……つふつ」 不服気に口を尖らせた聰史が可笑しくて虎人は思わず吹き出した

「僕 練習台にならいくらでもなりますから（笑）

いつかオファーがあるかもしれないラブシーンに備えて 過ごします
しよう！」

「よっしゃあつ！」

「よっしゃあつて（笑）結城さん……ちなみにどんなラブシー
ンやりたいんですか？」

「もろもろ……」

「……」

「工口いやつ」

「…………あなたの存在 자체が工口ですからねえ……」

「 そお？」

「 はい・・・かなり」

「 堂々巡りだね この話題」

「 はい・・・せめて自覚だけして頂けたらよろしいかと・・・」

「 僕はエロい と」

「 はい」

「 自覚しろと」

「 はい」

「 ふう〜ん・・・」

「 ふう〜んつて・・・」

「 僕のどの辺りがエロいんだらつか?」

「 ・・・・存在全部です」

「 僕 エロの権化?」

「 はい」

「 言い切るなよ・・・世間では 癒し系イケメンとか爽やか系イ

ケメンとか

いろいろ良くなっつてくれてるじゃん・・・

「 無邪気にほんわかと爽やかに エロいんです」

「 なんすと?」

「 いつでもどこでも 艶っぽいと「うか色っぽい」といつか

「 ・・・・・ふうん・・・」

「 まつ いーじゃないですか なかなかいないタイプですよきっと」

「 ・・・・・」

「 僕は好きですよ 結城さん」

「 ・・・・・」

「 ファンの人達だつてみんな そんな結城さんだつて判つて
応援してくれてるハズですし 西崎さんとかメロメロだし ねえ
人気者じゃないですか はつはつは」

「 わかった・・・もういい きりないし・・・」

「ゆづくじ寝たらすつきつしますよ」

「うん」

「寝ましょ寝ましょ 明日も朝早いですからね おやすみなさい」

「虎人」

「はい?」

「一緒に寝よ」

「は?」

「練習」

「・・・・うおおいつ!」

「嘘つきじゃん」

「今からですか? 無理」

「じゃ 一緒に寝るだけ ね 虎人冷え性じゃん 僕の足あつたか

いよ

「判りました おとなしく寝て下さい」

「はあ~い」

虎人の腕にしがみつくよにして身体をすりよせて

穏やかな寝息をたてはじめた聰史の無防備な寝顔を眺め

虎人は一人笑いを堪えるのに必死だった

面白いなあ・・・この人 不思議なヒトだ

何だかホントのところがよく判らなくて・・・それが魅力なのかな
格好良くて 大人なのに可愛くて

目が離せないよな・・・

聰史の額にそつと口づけると 虎人も静かに目を閉じた

12・東京の夜～その3（後書き）

「欧洲紀行記」はこれにてとりあえず終了テス
奈良に想いをはせながら（爆）虎人クンと相談の上
またお目汚しにお邪魔したいと思います
その折りにはまたお立ち寄り頂けたらと思います
読んで頂いて ありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4185d/>

虎人少年 欧州紀行記

2010年10月9日20時59分発行